

# 災害ボランティア

Disaster Volunteer GUNMA  
Voluntarios de Desastres GUNMA

# ぐんま通信

創刊号  
2005.12

企画・発行・編集：災害ボランティアぐんま  
災害ボランティアぐんま事務局（昭和庁舎1階）  
〒371-8570 前橋市大手町1-1-1  
Tel&Fax 027-221-5771  
URL：http://www12.wind.ne.jp/saivol/  
E-mail：saivol-g@dan.wind.ne.jp

9月1日「防災の日」

## 「災害ボランティアぐんま」設立

2005年9月1日、「災害ボランティアぐんま」の設立総会が群馬会館で開かれました。「災害ボランティアぐんま」は、近年、地震や水害など自然災害が多発する中、「災害ボランティア活動を組織化し、今後の災害に備えたい」と

そして地域力を付けていきたいと思  
います。  
「災害ボランティアぐんま通信」  
は、講習会の案内や会員の活動報告  
などを会員の皆様にお知らせしてい  
く予定です。

と県民有志20人が発起人となって立ち上げた県民主体のボランティア組織です。

大災害に備えて日常的に災害救援ボランティア活動を訓練することで、災害発生時ににおける県民への救援活動をはじめ、首都圏や近県での災害発生時の救援活動を行い、地域防災、災害救援に寄与することを目的としています。

防災意識というものは、自分の身近に災害がなければなかなか高まらないものですが、それでは間に合いません。災害から一人でも被害や犠牲を少なくしていくためにも、会員一人ひとりの防災力、



### 災害ボランティアぐんま第二回講習会について

日時 平成18年1月14日(土)11時から  
場所 県庁28階281会議室ほか  
負担金 500円(お昼代ほか)  
内容(予定) 炊き出し訓練  
普通救命救急講習  
定員 40名  
その他 当日は県庁1階県民ホールで防災フェアも実施しております。  
起震車や3D体験車の体験もできるので、奮って参加してください。  
申込方法 参加者の住所・氏名・電話番号・生年月日を明記の上、申し込んでください。  
定員に達した場合には、次回以降の講習会に参加してください。  
申込先 住所 〒371-8570  
前橋市大手町1-1-1  
(NPOボランティア推進課内)  
Tel. 027-226-2291  
Fax. 027-243-7706  
E-mail：npo@pref.gunma.jp

## 災害ボランティアぐんま

### 設置目的

- 1 群馬県内での災害発生時における県内被災者への救援活動
- 2 首都圏や近県の災害発生時における被災者への救援活動
- 3 災害等に備え、ボランティア、企業、大学、NPO等のネットワーク化
- 4 災害時のボランティア活動において中心的に活動できる人材養成

### 実施予定事業

- 1 災害時における救援ボランティアの指導者の養成と指導技術の向上...災害ボランティア・リーダー養成講習会の開催、リーダーのネットワーク化、情報の共有など
- 2 災害時に備えた企業、各種団体、行政とのネットワーク化(相互交流、情報交換等) 定例会の開催、情報誌の発行、災害時に対応した各種団体情報の集約と整理など
- 3 自治体との連携による災害救援体制の構築...各市町村と協定を締結しボランティアセンターの設置運営を支援、ボランティアの派遣など
- 4 防災意識の啓発...消防署・行政等と協働して防災講習会・講演会の開催、消火・救助等の防災訓練など

挨拶  
設立総会に寄せて  
災害ボランティアぐんま会長  
四方浩氏 群馬銀行頭取



「災害ボランティアぐんま」は、昨今多発する自然災害の状況を踏まえ、災害時に備えて設

けられた県民主体の災害ボランティア組織であります。個人、企業、団体等と様々な構成員で成り立っておりますが、災害時にはそれぞれの持っている力、知恵、資源などを積極的に提供いただき、相互に連携・協力し、一丸となって、被災地の復旧復興の支援活動に大きなパワーを発揮していこうと組織化されました。

昨今の情勢では、災害はいつでも起きても、不思議ではない状況となっております。会員の皆様におかれましては、ぜひとも、当会において人や組織等のネットワークの構築を図り、日ごろから顔の見える関係づくりに努めるとともに、災害時におけるボランティア活動のノウハウ・資質の向上などに御尽力いただきたいと思います。

そして、群馬県内の多くの県民の方々と企業、団体等を巻き込んだ幅広い組織として、災害ボランティアへの熱い思いを盛り上げ、群馬発の災害ボランティア組織として全国に知れ渡る大きな組織として育つよう、皆様のお力添えをいただきたくよろしくお願ひ申し上げます。

挨拶  
みんなが助け合う  
群馬県に  
災害ボランティアぐんま最高顧問  
小寺弘之氏 群馬県知事



このたびの「災害ボランティアぐんま」の設立を意義の深いことであると感謝しております。

最近、災害に限らずボランティアでいろいろなことをやりたいという方が多くなりました。もともと福祉関係が多かったのですが、災害、文化活動、あるいは子ども教育、スポーツなどいろいろな面で自分の経験を活かし自分の能力を活かして人のため社会のために貢献したいという方が増えてきているのは、非常に喜ばしいことだと思っております。特に、10年前の阪神淡路大震災、昨年の新潟県中越地震をはじめ、災害は命に関わることであり、自衛隊、警察、消防と、いろいろな人たちがタツチしますが、最後は人と人が助け合い、人の気持ちを汲んでいろいろなことをやるということが非常に大切であると思えます。

ただ、いかにしてそういう方々を助けることができるか。それはある程度組織立ててやらないと、ちくはぐになつてしまふ訳ですから、そういう点でこのような組織を立ち上げて、みんながある程度心得た上で活躍していたければ、皆さんのそういう気持ちや、

効果が何倍と発揮できる訳であり、非常に大切なことだと思っております。今日は、設立総会、そして記念講演として、私どもが尊敬し、公私ともにご指導いただいております元内閣官房副長官、現在は災害救援ボランティア推進委員会の会長もなさっておられます石原信雄先生に貴重なお話を伺うことは非常に有意義であろうと期待しております。どうかこれを契機にみんなが助け合う群馬県にして参りたいと思っております。

祝辞  
ボランティアは  
世の中を支える柱

中村紀雄氏 群馬県議会議長



このたびは「災害ボランティアぐんま」の設立、大変おめでとうございます。県議会を

代表致しましてご挨拶させていただきます。

知事のお話にもありましたが、平成7年に阪神淡路大震災がありました。この年はボランティア元年と言われますが、今まで自分のことしか考えないと言われた日本人が、若い人たちを中心に1年間に延べ140万人近いボランティアの人たちが阪神淡路の災害に駆けつけて大きな役割を果たしました。1月17日は、「災害ボランティアの

日」とすると閣議で決められ、いろいろな市民活動、ボランティアを見直すことが加速し、NPO法の成立につながるという動きがありました。

今、ボランティアが世の中を支える大きな柱の一つとなっておりますが、特に災害のボランティアは大切ではないかと思えます。阪神淡路に代表される災害ボランティアがいかに活躍したか、そこにどういった問題点や課題があったかを教訓とし、学び活かすことが一番大きな課題ではないかと思えます。

新潟県中越地震では、私もNPOに関わっている立場から仲間と参加した経緯がございます。そのとき私は、ボランティアの人たちの熱い心を有効に活かすには、日ごろから備えがないとうまくいかないのではないかと感じた次第であります。本県は災害は少ない県と言われていますが、近県のいざというときには、馳せ参じなければならぬ、協力関係を築かなければならぬ大切な時期にあるのではないかと思えます。そういう意味で、「災害ボランティアぐんま」という大きな組織が立ち上がることは非常に意義があり、実にタイムリーな設立であると思えます。

この「災害ボランティアぐんま」の組織が所期の目的どおり大きく進展致しますよう、心からご祈念申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

記念講演

演題 「災害ボランティアの重要性」

災害救援ボランティア推進委員会会長 石原 信雄氏

阪神淡路大震災を教訓に

「防災の日」である今日9月1日に、群馬県でボランティア組織が結成されたことは非常に時宜を得たことだと思います。

私はちょうど10年前の阪神淡路大震災の際、内閣で災害対策の責任者という立場にあり、その経験からボランティア活動の重要性を痛感した次第であります。役人を辞めた後、政府の組織としてではなく、純粹に民間の組織としていろいろな方々のご協力を得て、「災害救援ボランティア推進委員会」を立ち上げました。これは、災害の際にボランティア活動を志す人たちに必要な教育訓練を施すという目的で作ったものです。

昨年の新潟県中越地震では、群馬県のボランティアの皆さんと協働で、災害の最も厳しかった川口町を中心に支援活動を展開しました。延べ2千人の方に応募していただき、11月4日から12月3日まで962人の方が実際に現地で支援活動に携われました。住民の皆さんが一番困っていることを集中的にお手伝いいただいたと聞いております。川口町の住民の皆さんは群馬県の皆さんに大変感謝していることをご紹介させていただきます。

災害でライフラインが  
ズタズタに

災害時においてボランティア活動がいかに重要か、阪神淡路大震災の体験、教訓をご紹介したいと思います。

あの震災は、100万都市神戸をはじめ阪神都市の直下型地震であり、しかも未明の5時46分に発生しました。大都会で直下型の地震が起こると、まず車が通れなくなる。電柱が倒れたり、駐車していた車が壊される。鉄道も寸断されてしまう。電柱が倒れ電線が切れてしまうから停電になるし、電話は通じない。いわゆるライフラインが寸断されてしまいます。あちこちで火災が発生する。そうした状態が瞬時に起こったわけです。

通常、住民としては災害が起こったから消防や警察、自衛隊、海上保安庁などの公的機関がすぐ助けに来てくれるだろう、また助けに来るべきだと思われるでしょう。しかし、大地震発生直後の段階では、ライフラインがズタズタで救援部隊が入れないのです。

自力と家族による救出が7割

こうした時、一番頼りになるのは、自分自身であり、家族であり、隣近所



る。市民の皆さんの防災の知識あるいは救命救急活動の体験が極めて重要であると痛感したわけです。

ボランティアの意欲を  
最大限活かす

先ほど中村議長さんの祝辞にもありましたが、阪神淡路大震災では大勢の方が救援活動に参加していただきました。兵庫県庁の資料を見ますと、地震発生後の初めのひと月は一日平均2万人、次のひと月は一日平均1万4千人、震災発生から3か月間のボランティアのトータルは117万人と示され、いかに多くの方が馳せ参じたかがわかります。最近では「人情紙の如し」と嘆く人が多かったのですが、やはり日本人も捨てたもんじゃなく、人の災難を見かねて応援に行く人はたくさんいると、心強く感じたわけです。

しかし、活動状況あるいは現地の人のお話を聞いてみると、「大変ありがたかった」と、大抵は感謝しているのですが、なかには「足手まといになるだけだった」と言う人もいました。

なぜそういう差が出てきたかという点、災害救援活動について一定の知識や経験がある人とならない人の差が大きかったと言えます。経験がある人は現地では一切世話にならないという体制で、自分の食べ物、飲み物はすべて持って行くし、寝泊まりの準備もしておく。また、行った先で何が必要か直ちに極めて救援活動をしますから当然感謝されます。

また、大勢のボランティアが集中し

の人のことです。阪神淡路大震災の際、日本火災学会がどついつ形で、誰に助けてもらったか調査したところ、「自力で逃げ出した」が約35%。「親、兄弟、子どもなど家族が助けてくれた」が約32%。自分自身と家族で7割近くが助けられている。それから、「隣の人」が約28%、「通りかかった人」が約2・6%、「消防の救助隊や自衛隊、警察など公的な機関」が全体の約1・7%となっています。

公的機関は何をしていたんだ、とお叱りを受ける数字ですが、道路は寸断されているから、救急車もパトカーも消防車も走れない。公的機関は機能しなくなる。これが災害の実態なのです。

こうした実態やデータを見て、政府の予算や定員を増やすには限界がある

た場合には、コーディネートする人がいたかないかで全然違ったようです。グループの場合は、役割分担を決めるリーダーがいるといないとでは違うとも言われておりました。このようことから、災害ボランティアをやるということ、意欲のある人の善意を活かすために、最小限度の災害救援活動についての知識と経験を持ってもらうことが大切だと痛感いたしました。

### 災害救援活動の講座に 学生も参加

小寺知事の挨拶にもありましたが、やはりこれからの時代、何もかも行政が責任を負うということではなく、相当の分野においてボランティアのサポートが必要になってくると思います。特に災害においては、ボランティア無しには我々の安全は確保できないと思っております。そうしたことから、私は10年前に災害救援活動を志す方々を対象に講座を

開設いたしました。講座では、災害時にどういった問題が起こるかなどを伝える座学と実技指導の両方を行っております。はじめはこの活動に賛意していただいた東京の主要企業100社の従業員の方に受講していただき、その後、家庭の主婦や現役を退いた方など一般市民の方が半分という構成になりました。さらに、講座の立ち上げからのメンバーである前一橋大学の石弘光学長の提案で、一橋大学のキャンパスで講座を開いたところ、それをきっかけに学生の受講者がだんだん増え、現在は東京の主要な大学のほとんどから講座の開設に協力いただいております。

### 連携を取りながら助け合う

現在、講座を修了した「セーフティリーダー」は、首都圏で4千人を超えています。私はこの講座の考え方やり方を全国に展開したいと考えております。ただ、スタッフや経費に限りがあるため、首都圏以外ではそれぞれ

の地域の自治体や経済団体などが中心になって活動してもらいたい。そうした計画に対して、これまでのノウハウを全面的に提供するなどご協力申し上げたいと思っております。

今回、群馬県に災害ボランティアの組織が立ち上がったことは、大変心強く、これからも群馬県の皆さんとの連携を強化し、お互いに助け合う関係を築き上げたいと思っております。

群馬県は地盤がいため、人に助けられるよりも助けるケースの方が多いかもしれません。人間は助けられる立場よりも助ける立場になる方がはるかに幸せです。「情けは人のためならず」といいますが、災害時の助け合い運動というのは、私は大変貴重なものであると痛感しています。群馬県でボランティアの組織が立ち上がったことを本当に心から喜び、また感謝申し上げます。今日の記念講演とさせていただきます。ありがとうございます。

### 挨拶 全国先駆けの 会として

災害ボランティアぐんま理事長  
牛久保雅美氏 サンデン(株)会長



「災害ボランティアぐんま」は、全国に先駆けての会であるとい、特に意味を噛みしめて

## 編集後記

春からスタートした発起人会の皆さんのおかげで「災害ボランティアぐんま」が九月一日の防災の日に設立されました。いつ起こるかも知れない災害に備えてしっかりとした災害救援ボランティアの支援ためのシステムづくりとその準備が群馬県で始まります。

群馬県のみならず多くの地域でいつ起こるかわからない災害に備えて「みんなが助かる地域防災活動」が早期に整うように群馬県民みんなで活動していければと思います。よろしく願います。

設立発起人 鈴木孝尚

### 石原信雄氏 プロフィール

1926年、群馬県生まれ。東京大学法学部卒業後、地方自治庁に入庁。内閣官房副長官として、竹下元総理大臣をはじめ7人の内閣総理大臣に仕える。阪神淡路大震災では内閣官房副長官として災害対応、災害復旧に全力を尽くす。1995年7月、民間ボランティア団体「災害救援ボランティア推進委員会」を設立した。

### 災害救援ボランティア 推進委員会とは

1995(平成7)年7月、阪神淡路大震災の教訓をもとに、大災害を想定した災害救援ボランティアリーダーの育成・登録活動にあたる民間団体として設立された。今年8月には育成した災害ボランティアのリーダー数が4千名を超え、関東首都圏で最大規模の組織に成長。昨年の新潟県中越地震では、群馬県と協働して新潟県川口町の被災地を支援した。